

方略的能力とコミュニケーション方略：語彙レベル以上での方略
Strategic Competence and Communication Strategies (CS):
CS Beyond the Lexical Level

岩井 千秋 (広島市立大学)
iwai@intl.hiroshima-cu.ac.jp

I はじめに

70年代後半から始まったコミュニケーション方略(以下CS)の研究は、80年代にプロダクト中心の研究とプロセス中心の研究という異なる研究理論に枝分かれし、今日に至っている。しかし Ellis (1994) の指摘するとおり、いずれの研究方法でもその実証的研究は圧倒的に第2言語学習者の語彙の問題に集中して行われてきた。特に Nijmegen Project (e.g., Poulisse 1989) に代表されるプロセス中心の研究では母語話者と学習者の問題解決の方法は認知処理的にはほぼ同じとする考えが主流となり、Bialystok (1990) のように学習者も母語話者もまったく同等に見なし、外国語教育にはCSを導入する必要はないとする強く主張する研究者も出てきた。

しかし、プロセス中心の研究者の主張は、話者個人が語彙レベルの問題をいかに処理するかという観点からのみなされたものであり、これは実際の言語使用のCS使用を極度に単純化した考え方であると言える。本研究発表は、こうした単純化されたCS研究は学習者の言語使用の本質的な問題を覆い隠してしまうものであるという立場から、次の3点を中心にして行うことにしている。

- (1) CSの実証的研究が語彙の問題を中心にしてきたのは方略的能力 (strategic competence) を過小評価してきた結果であり、Canale & Swain (1980) 及び Canale (1983) の Communicative Competence を再評価し、方略的能力とCSの関係を明確にする必要がある。
- (2) Bialystok (1990) が、problematicity、consciousness、intentionalityの3つはCSの基準にならないとしたのは、単に語彙レベルの認知処理だけにこだわったからであり、語彙レベル以上で使用されるCSにはこれらの基準が必要である。
- (3) 実際のインターアクション上では、語彙レベル以上のCSが話者の問題意識を伴って使用されており、そのCSの種類やCSを使用する理由を知ることこそ外国語教育にとって必要なことである。この立場からすれば、CS不要とするプロセス中心の研究者の主張は容認することはできない。

発表は、発表者がミネソタ大学在外研究中(平成9年12月~平成10年3月)に referential communication、及び retrospective verbal report の方法で収集したデータに基づいて進める。また、この実験では、オーラルデータを直接コンピュータで録音し分析するソフトを開発して行ったので、このソフトの使用方法についても紹介することになっている。発表の概要は次の通りである。

II 90年代までのCSの実証的研究

プロダクト、プロセスいずれのCS研究でも語彙問題に限定されて行われたことを検

9月11日(金) 研究発表2 第6室 (T304)

証するため、それらの研究内容(データの収集方法、対象学習者、タスクの種類)及び主な結果について概観する。

III 90年代のCS研究

90年代に入り、CS研究は語彙レベル以上のCSを対象としてgrammatical, sociolinguistic, pragmatic, discourse等のレベルでも行われるようになってきた。(e.g., Kasper and Kellerman 1997) これらの研究を概観し、それらの特徴について検討する。

IV 方略的能力とコミュニケーション方略

Bachman (1990) の Communicative Language Ability に示された方略的能力を引用しながら、この理論モデルが語彙レベル以上のCS研究の必要性を説明するのに有効であることについて考察した結果を述べる。

V インターアクション上で使用されるCS

実験方法及び research questions については次の通り。

[実験方法]

- ・被験者 それぞれ5組の NS-NS, advanced NNS-NS, advanced NNS-NNS
- ・タスク 図形、写真、抽象的な絵それぞれ12枚を使った picture description による referential communication
- ・コンピュータによる音声録音及びビデオ収録。タスク終了後 retrospective interview を実施。

[Research Questions]

- 1 英語母語話者及び学習者がインターアクションしながらタスクを行うのに、問題意識にどの程度の違いがあるか。また、インターアクション上どのようなCSが使われているか。
- 2 タスクを行う際にインターアクション上で使われるCSにおいて、母語話者同士の場合と、母語話者と学習者、あるいは学習者同士の場合では、質的違いあるいは使用頻度上の違いがあるか。

[参考文献]

Bialystok, E. 1990. *Communication Strategies: A Psychological Analysis of Second-Language Use*. Oxford: Basil Blackwell.

Canale, M. 1983. "From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy," in J. Richards and R. Schmidt, eds., *Language and Communication*. London: Longman, pp. 2-27.

Canale, M. and M. Swain. 1980. "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing." *Applied Linguistics* 1: 1-47.

Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

Kasper, G., & Kellerman, E. (eds.) 1997. *Communication Strategies: Psycholinguistic and Sociolinguistic Perspectives*. Longman.

Poullisse, N. (in collaboration with T. Bongaerts and E. Kellerman.) 1990. *The Use of Compensatory Strategies by Dutch Learners of English*. Dordrent, Holland: Foris Publications.

【キーワード】 Communication Strategy, Interaction, Process-oriented approach, Discourse